
What a wonderful world

沙流芭 凍裏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

What a wonderful world

【Nコード】

N3293BA

【作者名】

沙流芭 凍裏

【あらすじ】

中年サラリーマンの主人公は、いつものように飲み屋街をぶらついていたが、不意に異空間に自分がいることに気づく。亡者に追われる中で、生き残るために頭の中に直接話しかけてきた人物と契約を結ぶことになるが、異世界の厳しい現実を目の当たりにする。今までの自分に嫌気のさしていた主人公は、生き残るため戦う道を選ぶことになるが、その世界の支配者は強力なバンパイアだった。

シリアスなファンタジー小説を目指しています。

今後残酷描写も出てくるかと思いますが、苦手な方はご遠慮ください。

プロローグ 〈現実世界の崩壊〉

外からは寒風の吹き荒ぶ音と時々何か獣の慟哭^{どうこく}が響いてくる。いったい何でこのような状況になってしまったのか、どこから説明したものか……。数時間前まで単なる一介の中年サラリーマンだったはずの自分が何故このような場所にいるのか、自分の中でも未だに整理が出来ていない。

40手前にして未だに平社員の俺は、いつものように早々と仕事を切り上げて、横浜野毛の飲屋街をぶらついていた。

まだ夜の8時をまわったところで、通りは会社帰りのサラリーマンで賑わっていた。行きつけの焼き鳥屋にでも行こうかと細い路地を曲がったところまでは良かったが、しばらくして辺りに漂う喧騒が全く消えていることに気が付いた。携帯を見ながら歩いていたため周りの変化に気づくのが遅れたのだ。周囲をきよきよと見渡したが、つい10秒ほど前までの賑やかさがうそのようにシーンと静まりかえっている。明らかに人気がなくなった周囲の状況をおかしく思った俺は、元の大通りに戻ってみた。

そこはまるで、終電を大分過ぎた平日のような状況だった。この辺は繁華街とはいえ渋谷や新宿と異なり、終電を過ぎると人气が嘘のようになくなる。いや、今はまだ夜の8時を過ぎたところだ。そしてしばらくして俺は、更に終電とは明らかに違うぞつとすることに気が付いた。通りの飲み屋の明かりは全て煌々としていているのだ。しかし外から暖簾^{のれん}越しに見えるはずの人影が全くない。試しに最寄の店の暖簾^{のれん}をくぐってみるが、客はおろか店員までいない。その串焼き屋のカウンターにはさっきまで客がいたことを思わせる飲みかけのビールと串焼きが残っている。しかも厨房には、焼きかけの串焼きまで残っている始末だ。俺は頭を真っ白にしたまま店の外に飛び出した。

「いったい何がどうなってしまったんだ…。」俺は、思わず独り言を呟いた。

そしてそいつは不意に現れた。

15m程離れた路地から人影が現れたのだ。俺は、その人影に向かって走りかけたが、その口から漏れた獣の唸り声に背筋に冷たいものを感じた。そいつは人と言って良いものか。ぼろきれをまっとうたそれは、人の形をしていたものの明らかに人とは異なっていた。目は濁って血走っており、口からは涎を垂らしている。肌は灰色に近く、まさに死んだ人間が腐るとこのような…。

「まさか…」

俺の頭の中に今まで見たゾンビ映画やゲームの映像が鮮烈に蘇った。その瞬間、俺に向かって近づいてくるそれを良く確かめる前に一目散に逃げ出した。

いったい何の冗談なのか全く理解ができなかった。

幼い頃から空想癖があった俺は、空想世界への対応には慣れていたはずだが、それが現実になることには全く慣れてなどいなかった。

ゲームであれば、武器があつてゾンビとも対等に戦えるかも知れないが、そんなものは現実世界で持ち合わせているわけもない。俺は息継ぎも忘れてひたすら走ったが、運動をしなくなって久しく100m程で気持ち悪くなりかけ、後ろを振り返った。どうやらゾンビと思しきそいつは足は速くないらしく既に暗闇の中で見えなくなっていた。

「いったい何がどうなっているんだ。」

大きく呼吸をしながら振り返った瞬間、目の前の路地から今度は複数の亡者が現れた。後から気づいた事だが、そいつらの格好はどうも現代の服装とはかけ離れており、ぼろぼろの皮よろいのようなものをまとっていた。

「ちょっ。」

こんなところで、死にたくない。

俺は、言うことを聞かない足腰をぎこちなく必死に動かして逃げ出した。
鉤爪のようなものが俺の背後から肩を掴んできたが、必死に振りほどいた。

皆からは刹那せつな的な生き方だねと言われることが良くあった。
楽しみと言えば、酒飲んで意識が混濁した状態で空想に耽ふけることぐらいで、あまり生きているという現実感を感じられない生き方をしてきたと思える。

ただこんな理由もわからない空間で、わけもわからない死に方をするの、嫌だと思った。

「痛つうっ」

急に左腕に激痛が走ったかと思うと気づかぬうちに亡者の鋭い爪が食い込んでいるのが見えた。

ここにきて普段生きていて感じられなかった現実が、リアルに思えてくる。

こんな夢か現実かわからない空間で死にたくねえよ。

自分では気づかぬうちに辺りは死者の群れに囲まれていた。

俺は唯一閉ざされていない細い路地に逃げ込んだ。

人一人手を広げたら両端に届いてしまうぐらいの狭い路地である。

こういう路地は、歩道として計画的に作られたわけではないことが多いため、大抵は袋小路になっていることが多いのだが、予想に違わずこの路地も30m程行くと行き止まりとなっていた。

低い唸り声を出しながら、ゆっくり、ゆっくりと背後から死者たちが近づいてくる。

俺は辺りに逃げ道がないか見渡すが、飲み屋の裏口のようなものは一切見当たらなかった。

持ち物は、使い古してぼろぼろのビジネスバックだけである。

俺は、この状況にきて何故か自分に笑みが浮かんでくることに気が

付いた。

このまま気がふれてしまえば、楽かもしれないな。
そんな思いがふと脳裏をよぎった。

（あなた、生きたい？）

ふいに俺の頭の中に直接女性の声が響き渡った。

「誰だ、あんた？」

奇妙かもしれないが、俺は頭の中に直接響いてきたその声に返答していた。

（あなた、このままだと死ぬわよ）

再び何の感情もない声が頭の中に直接響いた。

まるで、薬殺前の野良犬に対して話しかけるとこのような感じになるかもしれない。

そして、犬歯が異常に発達した亡者が俺に襲い掛かってきた。

首筋に激痛を感じ、体に生暖かい液体がかかるのを感じた。

そして、目の前がセピア色に変貌していく。

「死にたくない。まだ生きたい。」

俺は必死になって叫んだ。

（私を受け入れなさい）

何のことかわからなかったが覆いかぶさってきた亡者を弾き飛ばすと辺りを見渡した。

袋小路の壁の前にスーパーボール大の発光体が浮かんで漂っていた。

（私をうけ入れなさい）

俺はその発光体を両手で優しく掴むと必死に食するかのように受け入れた。

その瞬間、目の前が真っ暗となり、俺はそのままブラックアウトした。

第一話 契約

どのくらい気を失っていたのだろうか。

暗闇の中で目覚めた俺は、辺りを見渡し目を大きく見開いた。

細い路地を亡者の群れが折り重なって倒れている。

しかも皆、獣の群れに食いちぎられたかのように五体満足な死体は残っていない。

首から上を食いちぎられたもの、はらわたを食いちぎられたもの、またほとんどの亡者が手足をばらばらにされていた。

まだ、夜中のようだ。長くて数時間気を失っていただけのようだ。そう言えば、俺は首に噛みつかれてからどうなったんだ。

自分の首に手を当てたが、何故か傷口は塞がっているようだ。

あの出血からすると首の動脈を食いちぎられたかと思ったんだが…。

（ようやく気がついたかい？）

またあの女の声が頭の中に直接響いた。

冷たく妖艶な声である。

若い女性のようにでもあるが、妙に落ち着いており年の頃が想像つかない。

（精神力が弱っていたんで、私を受け入れたとたん、意識を簡単に乗っ取らせてもらったよ）

「お前は何者だ」

（助けてやった礼をまずは言ってもらいたいもんだね。千切れた首の動脈まで再生してやったんだよ）

「それについては礼を言う。」

（まあいいさ。礼はこれからちゃんとしてもらうから）

「いったい、何のことだ。」

（私を受け入れたということは、契約を締結したということなんだ

よ)

「そんな勝手な。確かに受け入れたが、契約なんて聞いていない。」
(この世界ではどうか知らないけど、私の世界ではそうなるんだよ)

俺は、この気味の悪い女からどうにか逃れたいと思ったが、こんな状況からどう逃れてよいかわからなかった。何といっても奴は体の中から話しかけてくるのだ。

(私から逃れようとしたって無駄だよ。あんたを助けた代わりに私の手伝いをしてもらいたい)

「勝手に人の頭の中を読んだのか。」

(頭の中だけじゃないよ。体の隅々の状況まで全てわかるよ。アルコールの飲みすぎで肝臓はぼろぼろだし、右膝は古傷があるみたいだね。まあこのままだと長生きしてもあと20年てとこだね)

俺は、心底気味が悪かったがやはりどうにもならなかった。

確かにこの女の言うとおり、毎日ワインをボトル1本空け続けて10年以上経った体は、成人病のデパートと言われるくらい毎回健康診断に引っかかっていたし、右膝も1年以上前に泥酔して階段を踏み外して脱臼してから未だに正座がまともにできない状態である。

(早速だが、契約を遂行してもらおうよ。あんたには別ドメインへ遷移してもらい、私の体を一緒に捜してもらおう)

「はっ今何て言った。別ドメインって何のことだ。」

(まあ簡単に言えば別世界ってことさ。この町の一角が何かのほずみで別次元のドメインに繋がりがやすい状況になっちゃってね。そこに出てきたのがあのゾンビどもってわけさ。ただ元々繋がりがないリージョン同士なので、その世界で実現化するのは簡単じゃなくてね。次元の狭間を彷徨っていたところにあんたが入り込んでしまったのさ。理解できたかい)

「科学的には全く理解できないが、言っていることはなんとなくわ

かった…。」

正直理解の範囲を超えていたが、何故か女の言っていることは妙な説得力があった。

（まあいいさ、お前に理解してもらおうとも思っていない。私も自分の体から意識体のみ分離して長い間経ってしまったお陰でかなり弱っていたところだったんだ。たまたま、次元の狭間にあんたが彷徨いこんでくれて助かったよ。さすがにゾンビどもの体に入るのは私もぞっとするんでね）

不思議なことに俺は、こんな突拍子もない話の流れに身を任せてみる気になっていた。

今まで40年近く生きてきて初めてリアルな生に出会った気分だったのだ。

「どうすれば良い？」

（まずは私の奪われた体があるドメインに遷移する必要がある。この周辺は次元が歪んで重なりあっているからその中でも一番ドメインと繋がり強い次元の綻びを見つけることにしようかね）

「わかったが、お前のことは何と呼べばよい。」

（アケーシアとでも呼んでおくれ。当然トゥルーネームではないけどね。魔女は真実の名前を知られると魔力を失ってしまうからね）

「じゃあ俺のことは、エッジとでも呼んでくれ。」

俺は、どこからどう見てもベタな日本人顔だが、このアケーシアという魔女と同じく偽りの名前を名乗ることにした。まあ異世界の人間に日本人の顔立ちから名前が変だとわかるわけもない。

「さて、案内してもらおうか。」

俺は、真っ暗な路地から月明かりの大通りに向かって歩みだした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3293ba/>

What a wonderful world

2012年1月9日20時47分発行